

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第7回フォーラム研究会  
逐語録

(木村) それでは、第7回のフォーラム研究会を始めたいと思います。

資料の確認をしたいと思います。まずは議事次第です。F7-0 を振ってください。次に、第6回フォーラム研究会の議事録が F7-1 です。次に、「フォーラムへのご協力のお願い」が F7-2 です。続いて、フォーラム参加申込書が2種類ありますが、経歴の質問がないほうが首都圏住民用で、F7-3 です。経歴の質問があるものが原子力学会員用で、F7-4 です。次に、「フォーラム」とは? という資料が F7-5 です。最後に、A3 で縦に印刷してある資料が F7-6 になります。以上が準備した資料ですけれども、よろしいでしょうか。

では、議事次第に従って話していきますけれども、情勢を言いますと、12月20日の午前中に業務推進全体会合があります。その後、午後に社会調査のワーキンググループがあって、そこで輿論科学協会さんとも打ち合わせて、調査票を確定したいと考えています。それに向けて、フォーラム応募の部分に関してご議論いただくというのが今日の大きな議題のひとつです。

もうひとつは、10月の終わりから11月上旬にかけて、PO(プログラムオフィサー)の岩田先生と、この研究のおとしどころについて、いろいろディスカッションをしました。このフォーラムは、特定の人を必要としないシステムとして確立できるのではないか、ということで、システム化をしたいという話をしていました。

さらに、12月の中旬に、原子力と社会に関する研究のワークショップがあって、このプロジェクトに関係する人たちが集まって、いろいろ議論をしました。そこで私がシステム化について少しお話をしたところ、社会系の先生方からも受けがよくて、「こういうことは必要ですね」「横展開をするときには価値があるのではないのでしょうか」というような話もありました。

そういうこともあったので、システム化について、私と竹中君である程度整理をしました。その内容をご説明して、皆さんの経験、あとはフォーラムの記憶を掘り起こしてもらって、いろいろご意見をお聞きしたい、というのが2つ目の議題になります。

## 0. 議事録確認

(木村) まず、前回の議事録ですけれども、かなり前にメールでお送りしていますので、ご確認いただければと思います。シンポジウム前に、シンポジウムをどうするかということを議論した回になります。

## 1. フォーラム応募について

(木村) では、早速ですけれども、フォーラムの応募について、議論を始めていきたいと思います。F7-2を確定するのが、今日の一番の目的となります。

この案内状ですが、昨年度からほとんど変わっていません。ホームページのURLや、来年度はシンポジウムはフォーラムの直後にはやらないだろうということで、シンポジウムの部分は削ったりしていますが、実はほとんど変えていませんので、この後少し時間を取って見ていただいて、気になったところや、文言などについてコメントをいただければと思います。

それから、F7-5の「フォーラム」とは?という資料がありますけれども、予算との兼ね合いなのですが、今回は、F7-2の折込の中に、フォーラム参加申込書と「フォーラム」とは?を挟みこんで配布したいと思っていますので、こちらの「フォーラム」とは?も読んでいただいて、ご意見をいただきたいと思います。

F7-3とF7-4のフォーラム参加申込書は、後ほど別途議論したいと思います。

まずは、F7-2とF7-5の2種類について、これから10分間時間を取りますので、読んでいただいて、気になるところをチェックしてください。

なお、F7-2の1ページ目の文章をできるだけ短くしたいと思っています。ですので、ここは削ってもいいのではないかと、という提案がいただけるとありがたいです。よろしくお願ひします。今日はプロジェクターも用意していますので、コメントをいただきながら、リアルタイムで文章を直していきたいと思っています。

そうしたら、13時20分まで、各自F7-2およびF7-5を読んでいただいて、チェックをしてください。では、少し時間を取りたいと思います。

(各自資料に目を通す)

(木村) だいたい時間になりましたけれども、よろしいでしょうか。

そうしたら、まずはF7-2のほうからいろいろとご意見をいただければと思いますけれども、いかがでしょうか?

—— 細かい点ですけれども、2 ページ目の下から 4 行目の「よりよいフォーラムを作ってゆくため」は、「いくため」に直したほうがいいと思います。

—— 1 ページ目の真ん中辺り、「フォーラムには～」の段落の 3 行目、「対等な立場で話しあいます」の「あい」だけがひらがなになっています。他のところは漢字になっています。

—— 最後のページの、「フォーラムの参加に伴う危害の可能性と、それに対する配慮について」の 2 行目、「フォーラム参加申込書をご提出された場合」は、「提出された場合」でいいと思います。敬語が 2 つつながってしまうので。

—— 1 ページ目の文章短縮の案なのですけれども、2 行目の「原子力発電や原子力政策などにかかわっている人たち」というところは、「発電や原子力政策など」を取って、「原子力にかかわっている人たち」にする。「ひとくくりにしてレッテルをはる」というところは、「レッテル」という言葉の中に「ひとくくり」というニュアンスは入っているから、「ひとくくり」はいらない。で、「原子力にかかわっている人たちにレッテルをはるために使われている言葉です」にすると短くなると思います。

それから、「一般の人びと」というのは、2 ページ目では「一般の方」とあるので、「一般の方」に統一してはどうでしょうか。

それから、「一般の人びとと原子力専門家との間で、コミュニケーション不全を起こしている関係性が、将来のエネルギーや原子力に関する真つ当な議論を阻害するのではないかと危惧しています」というところは、「将来のエネルギーや原子力に関する」という部分を削って、「一般の方と原子力専門家のコミュニケーションを阻害しているのではないかと危惧しています」にすると短くなります。一般の方は、天下国家をあまり論じないのではないかなど。だから、「将来のエネルギーや原子力に関する」という言葉を入れなくて、「コミュニケーション阻害」と言ったほうが、申し込みのバリアが低くなるというメリットもあるかもしれない。

(木村) 私は、「一般の人びと」と言っているときは、広く一般の人びとの話をしていて、「一般の方」と言っている場合は、あなた方、というイメージを入れて、使い分けています。

—— コミュニケーションは、1 対 1 だと思うのですが。

(木村) このページでは、まだ一般論を話しているのです。まあ、どちらでも構わないのですが。一般論のときは「人びと」で、次のページで「一般の方」になっているのは、あなたに訴えかけているんです、ということで「一般の方」にしている。でも、「一般の人た

ち」もありますね。

—— 「一般の人びと」というのは敬語が入っていないので、「一般の方」と言ったほうが丁寧聞こえるのですよ。「一般の人びと」というと、上から目線の印象を受けないかなと。

(木村) どちらにせよ、「人びと」にするのか、「人たち」にするのかは統一したほうがいいですね。「方」にするかどうかは、全体のボリューム感との兼ね合いですね。

—— それから、もう1ヶ所短縮候補があります。4つ目の段落の「そして、立場を越えて共に考え、お互いを尊重することによって、将来のエネルギーや原子力について協力して取り組んでいけるための新しい関係性」、ここも天下国家の話が出てくるけど、それを取って、「お互いを尊重して、協力できるための新しい関係性」として、エネルギーとか、原子力とか書かないほうが柔らかいかなと。

(木村) 今の短縮の案について、いかがでしょうか？ 要は、「将来のエネルギーや原子力について」を取ってしまって、シンプルに、コミュニケーションの不全と、尊重できるような関係を生み出すという話にしたらどうか、ということになります。

2ページ目以降は、エネルギーや原子力については一切触れていないのですよね。だから、1ページ目からなくなると、全てからなくなることになるのですけれども。まあ、ホームページには書いてあるので、ここに書かなくてもいいのですが。

—— 「コミュニケーション」の中に、言わずもがなで入ってくるので、あまりエネルギーだ、原子力だ、と言わなくてもいいような印象を、私自身は受けます。

—— 頭紙の文章を短縮することによってできるスペースに、何か他のものを入れる予定があるのですか？

(木村) いや、そうではなくて、もう少し短くしたほうが読みやすい、敷居が下がって導入がしやすい、というだけなのですけれども。

—— 私は、2行目の「たとえばマスメディアやインターネットなどで、～ひとくくりにしてレッテルをはるために使われている言葉です」のところの、「たとえばマスメディアやインターネットなどで」はなくても分かるかなと思ったので、ここは要らないと思いました。

それから、「将来のエネルギーや原子力に関する」という言葉を入れるか入れないかに関しては、「コミュニケーション不全を起こしている関係性が、将来のエネルギーや原子力に関する真っ当な議論の実施を阻害するのではないかと危惧しています」というところは、

割とうなずけるところなので、あってもいいかなと思うのですけれども、下のほうの、「将来のエネルギーや原子力について協力して取り組んでいけるための新しい関係性を生み出していきたいと考えています」のところはなくてもいいかなと。それだけの話し合いではなくて、コミュニケーションを取れるような関係を築きたいということのほうが最後には大切だったので、ここは要らないかなと思いました。

そして、1 ページ目が長く見えるのは、「フォーラムは、昨年に第1シーズン全5回の～」という段落が一緒にくっついているからだと思います。その間を1行あければ、短く見えるのではないのでしょうか。

—— ホームページの URL の前に、「ご興味があればご覧ください」とありますが、「ご興味があれば」は要らないのではないかと思います。「ご覧ください」だけでいいと思います。3 ページ目の上から3行目も同様です。

それから、今、「マスメディアやインターネットなど」は要らないというご意見がありましたが、前回のフォーラムに参加した一般市民の人たちから「原子カムラという言葉は知らなかった」という声もあり、使われているのはマスメディアやインターネットだということがあるので、「マスメディアやインターネットなど」はあったほうが良いと思います。それがないと、一般の人が読んで、「原子カムラなんて言葉は知らない」と思ってしまい、もう興味がなくなってしまうのではないかという気がするのです。

—— 最近、小泉さんが使うようになりましたけど。

(木村) 社会的認知が上がるかもしれない。

—— 次のフォーラムでは、「ああ、小泉さんが言っていたね」という発言があるかもしれないですね。

(木村) 他はいかがでしょうか？

では、まずは後半の「将来のエネルギーや原子力について」という言葉は消します。実はこれを作っているときに、私も、ここまでは言えないよな、と思うところがあったので。フォーラムは、その手前までが目的なので。言うとしたら、立場を越えて、「共に考え」というよりは、「お互いに理解し」などでしょうか。

—— それは前回のフォーラムの成果でもありましたからね。

—— 次の段階までには、まだかなり遠いですよ。

(木村) 遠いです。なので、書けるのはここまでかなと。

—— エネルギーや原子力について、自分が何か意見を言わなければいけないと思うと、肩に力が入ってしまうから。

(木村) ただ、その前の文章とのつながりもあるので、例えば、「立場を越えてお互いを理解し、尊重できるための新しい…コミュニケーションの関係性」っておかしいな。

—— 「新しい関係性」でいいと思いますよ。「新しい関係性」の中には、当然コミュニケーションも入りますよね。

(木村) では、シンプルにそうしましょうか。

それから、上のほうについては、実は、「コミュニケーション不全を起こしている関係性が～」という文は、前はなくて、今回加えたのです。

—— 「コミュニケーション不全を起こしているのではないかと危惧しています」でもいいと思いますけど。

(木村) それでもいいですね。または、「将来のエネルギーや原子力に関して、コミュニケーション不全を起こしているのではないかと～」と言ってしまってもいいかなと思ったのですが、どうですか？

—— 私は、原子力カメラというレッテルを貼ったことの弊害は、エネルギー問題よりも、放射線の健康影響の問題のほうが大きいと思っています。専門家の意見を聞かなくなって、子供たちを家に閉じ込めて運動させないことによって、体力不足になって、明らかに健康を阻害している。私は、天下国家の話よりも、そういう身近な問題のほうが大きいような気がするのです。

—— 悲しいことに、地震の被災地とそうではないところ、それから、原発の放射線が降り注いだところとそうではないところ、子供がいる人といない人とで、意識のずれがあって、健康被害のことは、他人事みたいに考えている人もいます。大切な話なのだけど、フォーラムでピンポイントにできる話題ではないのかもしれないな、と最近思ったりします。大切なことだということは分かっているのですけれども。

—— 「一般の人たちと原子力専門家とのこのような関係性」というところは、単に「このような関係性」では駄目ですか？

—— 「関係性」ではなくて、「関係」のほうがすっきりすると思います。

(木村) 「私たちは、「原子カムラ」と言われるような関係を」、これは、上に合わせるなら「表されている関係」でしょうか。うーん、ここは、「私たちは、このような関係を」でいいですね。

「このような関係を越えるために、どのような仕組みが必要なのか」は、気持ち悪いですけど。

—— 「このような関係を越えるための仕組み」。

(木村) 「越えるための仕組みを明らかにする」。もしくは「作り出す」ですか。

—— 「作る」のほうがいいと思います。

(木村) 「このような関係を越えるための仕組みを作る研究に取り組み始めました」でいいですね。「そのために、フォーラムという話し合いの場を、提案し」にしますか。「作る」が連続するのは嫌だから。

あとは、「マスメディアやインターネットなどで」という言葉があるのかどうか。竹中君はどう思いますか？

(竹中) 私はあってもいいかなと思うのですけれども。

それよりも、「たとえば」がどこに係っているのかが分からないです。

(木村) ムラの定義が1つではないから、「たとえば」と入れています。「レットルをはるために使われている」が「たとえば」なのです。「レットルをはるために使われている」と言い切っているのかなと思って。どうですか？

(竹中) 事実を大切にすれば、その文章は全部入れたほうがいいのですけれども、読んだときにそんな深いところまで考える人がたくさんいるかということ、別にそうでもないのだろうな、とは思いますが。

(木村) 「原子力に関わっている人たちにレットルをはるために使われている言葉です」。シンプルになるから、これでいいかな。

「たとえば」は要らないですか？ 「たとえば」を取るとひとつの定義みたいになってしまうので、それが嫌なのです。口語だと、「原子カムラという言葉は～レットルをはる

ために使われていたりします」なのですが。

—— 「レッテルをはる」と言わなくてもいいのかもしれない。レッテル貼り以外にも意図はあるかもしれない。

(木村) でも、レッテルを貼ることによって深く考えずにギャップを広げるという効果を含めて、あえて「レッテル」と書いているのですよ。

—— コミュニケーションの議論をするときには、レッテル貼りを取り上げたほうがいいですからね。

(木村) はい。

—— そうすると、話をするとき、自分の中に相手に対するレッテルがあったら、どんなにコミュニケーションをしても、自分自身が変わらない可能性もありますよね。

(木村) 自分でレッテルを貼って、そのレッテルを変えようとしなければ、無理です。

ただ、例えば「ムラ」に関するコミュニケーションでは、そのレッテル自体にいろいろな属性がつくかもしれない。

でも、例えば、「あいつは話をしても分からないからな」というレッテルで話し始めると、全然駄目ですね。そういう種類のレッテルを貼っていると、コミュニケーションは成立しないです。

—— 「たとえば」を入れるなら、その後に句点を入れれば、後ろに係るのでは？

(木村) 「たとえば」を文の最初に持ってくる、というのがありますけど。

「たとえば」を外すと、特に専門家のほうから批判が来るような気がするのです。「原子カムラって、レッテルの言葉なのか？」みたいな。

—— 「皆様は「原子カムラ」という言葉をお聞きになったことがおありでしょうか」と最初に言っているから、2つ目の文は、「たとえば、マスメディアやインターネットなどで、原子力に関わっている人たちにレッテルを貼るために使われています」だけでもいいかもしれませんが。そのほうが文章が鋭くなる。1行目と2行目で「原子カムラ」という単語が繰り返されると、冗長という印象を受けます。

私は、2文目も主語があったほうがいいような気がします。冗長になるかもしれないです



けれども。

(木村) 私も、冗長だけど、結構入れることが多いですね。

—— 原子カムラのことを全然分かっていない人たちに、「原子カムラという言葉で表されるような一般の人たちと原子力専門家との関係が」というのは分かるのでしょうか。

—— 原子力発電とか原子力政策と書くと、発電や政策に関係がない原子力学会の人たちは、ムラの範囲外になってしまうのですよね。「原子力」とぼやっと書いておいたほうがいい気がします。

(木村) (コメントを反映して訂正) こんなところでしょうか。見ているとどんどん気持ち悪くなるので、次に進みましょう。

—— 「フォーラムには、首都圏在住の一般の方 10 名、学会に所属している専門家 10 名に代表として参加していただきます」とありますが、「代表として」というのは要りますか？

—— 要らないと思います。フォーラムの中で、代表ではない、という話が出ていた気がします。

(木村) ええ。代表ではないと言っていたので、消しましょう。

1 ページ目で、他に何かありますか？

では、次のページにいきます。

—— 2 ページ目の網掛けは、もう少し濃いほうがいいのではないかと。

(木村) これは、たぶん印刷会社のほうで調整してくれると思いますから、大丈夫です。

では、文章を読むのに疲れた頃だと思いますので、ここで、第 1 回から第 5 回の日程と、実施内容のお題について議論をさせてもらえればと思います。

ここに日程の案を載せています。今年より 1 週間遅らせています。契約の手続きがまた今年ぐらいうれだろし、かといって 8 月に入るのは嫌だということで、ここに見ました。かつ、この日程は 3 連休にもかかっていません。どうでしょうか？ 対案は、1 週間前にずらす、です。

ここにいる人は、大丈夫ですか？ では、あとは今日来ていない方々に見てもらって、大丈夫だったらこれでいきたいと思います。駄目だったら、第二案は、1 週間前にずらす。つまり、今年と同じ週のタイミングでやる。これがまずは日程ですね。

—— 来年度は、フォーラムが終わった後のシンポジウムはないということなのですね？

(木村) 来年度は、最後にまとめてやろうかと思っています。2月くらいに、全てのまとめのシンポジウムをやろうかなと。今年と同じタイミングで一度やって、もう1回最後にやるのもおかしいので。

—— フォーラムに参加した人たちにもご案内して、来ていただけるといいですよ。

(木村) そうですね。最後のシンポジウムのときには、1年目の人、2年目の人に案内を出して、来てもらってもいいと考えています。

—— 最後というと、2月ごろですか？

(木村) おそらく2月ですね。

この前のシンポジウムはフォーラムの実施報告でしたけれども、今度は、研究成果の報告もやりたいと思っています。あとは、コミュニケーションの研究者もお呼びをして、コメントもいただきながら、というのがいいかなと思っています。

次に、時間帯ですが、第1回を4時間(13:00~17:00)にしていますが、これでいいですか？ それとも、5回全部4時間にしますか？

30分増えたからといって、時間がゆったりするかというと、そうではなくて、おそらくその中の15分ぐらいを休憩にあてられますね、くらいの効果しかないのですけれども。まあ、それが重要かもしれない、という感じもしないでもない。ただ、16:30までにしたのは、17:00までというと長すぎるので、皆来たがらないだろう、ということだったと思いますが。いかがでしょうか？

—— 参加者の負担感からいうと、17:00終了よりも、16:30終了のほうがいいですけど。

私たちとしては、あっという間に時間が過ぎるな、という感じがあります。いつも、「あと15分あれば」という感じがするのです。もしかしたら、15分あってもそう思うのかもしれないですけど。

まあ、今の時期と違って、日の長い時期だから、17:00までやっても、そんなに暗くはないですけど。ただ、あまり長いと、一般市民の参加が難しくなるかな、とも思います。

(木村) ちょっと情報提供ですが、社会調査ワーキンググループのほうで、市民の応募者数を増やすことができないかということで、調整をしてみたのです。前回は500人に配りましたが、それを3倍くらい、1500人くらいに配れないかという話をしていたのですが、

その話を輿論科学協会さんに持って行って、30万くらいでできますか、と聞いたら、「とんでもない、200万くらいかかる」ということでしたので、ちょっと無理ですね、ということになっています。

なので、F7-5をはさむくらいが関の山になりそうだなと。片面、白黒で1枚挟む程度かなと。

—— でも、F7-5があったほうがいいですね。あまりこういう経験がない人は、フォーラムと言われてもイメージできないと思うから。

(木村) そうなのですよ。なので、こういう絵があると分かりやすいかなと思って。

—— 何をやっているかが一目瞭然ですからね。

—— それに、今回は、もう少し詳しく見たい方はホームページを見れますから。前回の記録を見て、「ああ、こういうのなら、私も参加してみようかな」という感じで、もう少し気楽に参加できるのではないかと。

(木村) では、16:30まででいいですか？ 初回だけ17:00にして、その後の懇親会も予定で入れておこうと思います。

次は、実施内容ですけれども、初回は今年と同じくイントロダクションと、『原子カムラ』とはなんだろうか？という漠なものでいこうかなと思います。ここはもう（予定）も外します。

第5回は、予定ではありますけれども、今年と同じように、「もう一度考えよう。『原子カムラ』とはなんだろうか？」にしています。

第2回から第4回は何を書いておくか、ですね。ここについて、ご意見をいただければと思います。今年の実績ですということで、今年のテーマ名をそのまま書こうと思ったのですが、テーマ名が長すぎるのでやめました。

—— 今年は、第4回だけ毛色を変えたのを入れましたよね。そういう事実は書いたほうがいいのかなと思います。

—— それと、参加者自身から次回テーマを募りましたよね。そういうことも書いておいたほうが、柔軟性があるような感じがするのですけど。

(木村) 「話し合う内容については、フォーラムの中で皆様と一緒に考えていくので、変わる可能性があります」と書きましようか。

—— 「変わる可能性があります」よりも、「上記はあくまで予定です」のほうが、フレキシブルな気がしますけど。

—— 皆さんに宿題を出していただいたのが第4回でしたっけ？ それは、最初からそういう予定だったのですか？ それとも、途中で？

(木村) 第2回が終わって、第3回の設計をしたときに、第4回はこういう方向にしましょうと決めたのですね。第2回の最後に投票をしてもらって、第3回はこの辺りのテーマにするけれども、残りの部分は第4回にやりましょうという形にした。で、第4回をやるにあたっては、宿題という形にしましょうと。

—— その経緯も、ホームページを見れば分かるわけですね？

(木村) 分かります。

だから、予定というよりは、「実際に話し合う内容については、参加者の皆様と一緒に考えていきます。上記はあくまで予定として、第1シーズンの実績を基に記載しています」と下を書いておけばいいですね。

第2回は、確か、「原子カムラのイメージとは？」でしたね。第3回は「原子力に対する関心とは？」ですよね。第4回は何でしたっけ？

—— 安全性、必要性、やめることができるのか、エネルギーの中の位置づけ、ですね。

(木村) 「安全性、必要性」。これだけ書くと、推進っぽいけど。

—— 「やめることができるのか」が、「必要性」と併記されています。

(木村) やめることができるのか、できないでしょ、って問うているような。

—— 「本当に」という言葉が入っているので、それで柔らかい印象にしたのだと思います。

—— この辺は、テーマ名をどうするか、かなり検討しましたよね。

—— 正確に言うと、「原子力は本当に安全か？ 原子力は本当に必要か？ 原子力はやめることができるのか？」です。

(木村) 「原子力は本当に安全なのか、必要なのか、やめることができるのか?」。

—— あとは、「エネルギーの中の位置づけ」があります。

(木村) そこまではスペースに入らないです。では、このくらいにしておきましょうか。

—— 本当は、「どこまで減らすことができるのか」という表現のほうがいいですね。

政府のエネルギー基本計画がこの前発表されたけど、原子力を基盤エネルギーとして位置付けて、そして文章の中に、「できるだけ減らしていく」という記述があります。基盤エネルギーと書いてあるから、絶対に減らさない、というふうに見えるけれども、文章をよく読むと、できるだけ減らしていくと書いてあるのです。

(木村) では、そうしましょうか?

—— このテーマ名でやったんだから、そのままでもいいと思いますよ。「第1シーズンの実績を基に掲載しています」だから。

(木村) はい。では、これでいきたいと思います。

では、その他の部分はいかがでしょう?

—— 2ページ目に、「首都圏の方々から10名、原子力学会員から10名」という言葉が2回繰り返して出てくるのですが、必要ですか? 最初のページにも入っていますし。

(木村) これは、ある意味強調です。このくらい繰り返して、ようやく、「ああ、10名、10名なんだな」と分かるかなと。

—— 3ページの一番上に、シンポジウムの話が急に出ていますけど、要りますか?

(木村) これはミスですね。シンポジウムは直後にはやらないので、削除です。

あと、「運営についての公平性を保証します」とありますが、「公正性」のほうがいいでしょうか。

—— 「公平性」というのは、読んでいて違和感がありましたね。

—— 「公平性」は参加する人が感じることですから。

(木村) では、「公正性」にします。

それから、ホームページの URL ですが、ここに載っているのはトップページのアドレスです。トップページと、フォーラムの記録のページと、どちらを載せるのがいいと思いますか？

—— 「話し合いの様子」と書いているので、直接フォーラムの記録のページに行ける URL が書いてあるほうが親切ですよ。

(木村) ではそうでしょうか。

他はいかがですか？ まあ、あとは但し書きみたいところですけど。

—— 連結不可能匿名化というのはどういう意味ですか？

(木村) 個人情報を扱うひとつの方法です。大雑把に言うと、誰が言ったかが分からないようにしておく、ということです。まあ、内部の人だと分かりますけど。第三者が読んだときに分からないようにする、ということです。

他はよろしいでしょうか？ では、これで一応の確定としたいと思います。

それでは、ちょうど 14 時半なので、10 分ほど休憩しましょう。

(休憩)

(木村) では、再開します。

今、F7-2 の修正したバージョンを配布しましたので、時間があるときに見てもらって、細かい指摘をもらえればと思います。

次は、F7-5 について、ご意見をいただければと思いますが、いかがですか？

—— 1 行目は、「市民と専門家がお互いに」より、「お互いを」のほうがいい気がします。

(木村) 「市民と専門家がお互いを尊重できるようなきっかけとなる仕組み」。これならいいですかね。

他はいかがでしょうか？

—— 「ファシリテーター」という言葉は難しすぎると思います。

(木村) 「グループの中の 1 名がファシリテーターになります」は、上の文にも書いて

いないから、書かなくてもいいかなと思いますが、どうでしょうか？

—— 「6~7名で話し合います」までで切ったら？

—— くじ引きの話までは入れたほうがいいと思います。

—— 「全体共有」というのは、全体の情報共有だということはわかりますか？

—— 「情報」という単語を入れたほうがいいですね。

(木村) 「情報」なのか、「意見」なのか。どちらがいいですか？ 「全体での意見共有の様子」にしましょうか。「グループワークの後は、全体で、意見共有をします」。

—— てにをはの問題なのですけれども、「さまざまな意見を持っていることに気づき、お互いに」は、「さまざまな意見を持っていることに気づき、お互いを」のほうがいいと思います。

(木村) 他はいかがでしょうか？

全体のバランスとして、実は、真ん中の写真はたくさん人がいるから大きめにして、下の写真は人が少ないので小さめにしています。

あとは、Word 的には、「雰囲気作りをしたり」のところにエラーが出ていますけれども。

—— 「雰囲気作りをする、～心がけるなどです」のほうがいいかもしれません。

—— なんとなく、「直接コミュニケーション」というところが気持ち悪いですけれども。

—— 「人となりを理解しあう」はひらがなでいいですか？

(木村) ああ、そうですね。今までは漢字の「合う」ですね。

こちらは文章があまり多くないので、このくらいで大丈夫ですか？

—— 「参加者が公平と思える場作りをする」は、「公平」でいいのですか？

(木村) これは参加者が思うことなので、公平で構いません。

では、これも印刷して、皆さんに再度お配りします。

写真の写り具合はいいですか？ このくらいだったら白黒でもいいですよ？

—— 大丈夫だと思います。

(木村) そうしたら、F7-3、F7-4に話題を進めていきたいと思います。

実は、社会調査グループのほうで検討を進めて、そもそも社会調査の中身が変わってきているのですね。それもあって、今年の調査にないものは外しています。

まずはF7-3(首都圏住民用)です。表は前回と同じなのですが、裏面は、Q7(省エネ)、Q8(電気料金)を消しました。これは前回も選定に使わなかったので消しています。

F7-4(原子力学会員用)に関しては、これは私の案なのですが、Q3(経歴)は選定に使っていないので、消してしまっています。そうすると、首都圏住民用と原子力学会員用の内容が共通になるので、そういうふうになっています。裏面のQ7(省エネ)、Q8(電気料金)を消したのは、首都圏住民用と同様です。

この案に対して、Q7、8は復活したほうがいいのか、そういうご意見があればここで聞きしたいと思います。いかがでしょうか？

—— F7-4のほうですけれども、Q3(経歴)はあってもいいのかな、とは思っています。

(木村) 実は、Q3(経歴)、Q7(省エネ)、Q8(電気料金)を削れば、片面で収まるのではないか、という目論見があります。Q6(経済発展)も消してもいいかもしれない。Q5(安心-不安)くらいまでは聞いてもいいけれども、経済的な発展性は別に聞かなくてもよければ、片面だけに収まるのではないか。

—— そのメリットは大きいなと思いつつも、もしもうれしいことに(応募が)たくさん来たときは、同じ条件の人がたくさんいるわけじゃないですか。そこで効いてくるような項目が、社会調査票のほうにあるのであれば、入れたほうがいいのかと思うのですけれども。

(木村) たぶん、前回はそれがQ5、Q6だったのだけど。(基本はQ1~4で選定。重複があればQ5、6を基準にしようと計画していた)

ちなみに、本調査票のほうでは、原子力に関する考え方を聞く質問が1ページにまとめられています。関心が1つ目。利用が2つ目。この利用というのが、参加申込書のQ4になります。3つ目が有用-無用。その次が安心か不安か。これは参加申込書のQ5に対応します。最後に経済発展性があるかないか。これが参加申込書のQ6です。前回は、利用、安心-不安、経済発展を取ってきているということなのですけれども。

申込書の項目に関しては、社会調査グループで確定するものなので、「こういう質問はどうでしょうか」ということをお願いをして、向こうで確定してもらおうかなと思っています。



す。何かそういうところでご意見があれば、と思っています。いかがでしょうか？

そういう意味では、先ほどのご意見は、F7-4のQ3（経歴）は残しておいてもいいのではないかということですね？

—— そうですね。

（木村） 最後の2問（省エネ、電気料金）はどうですか？ 残しておいたほうがいいですか？

—— 省エネに関しては、急に言わなくなりましたね。世の中もそういうムードになりましたよね。

（木村） なので、今聞くと、逆に浮くかなとも思って。

—— 本当は、省エネが軽んじられているのは危ないのですよね。今、火力を実力以上に動かしているから。本当は1年で定期点検をしなければいけないのに、法律を改正して、延ばして、もう本当に老朽化した発電所も綱渡りで動かしている状態だから。来年の夏まで大丈夫かどうか。もし火力発電所が一気にとまったら、また省エネの話が出てくる可能性は十分にありますね。関西は、予備率が3%くらいしかないから。関東は予備率に余裕があるので、あまり心配はないのだけど。関電と九電が厳しいですね。

まあ、質問としては、Q7、Q8はなくてもいいと思いますね。

節電に関しては、個人的には残したいけれども、あまり分析には使っていないと？

（木村） 使っていないですね。

あとは、入れるとしたら、面白そうなのは、本調査のQ4（個人の信頼）とか。

—— 安心かどうか、利用すべきかどうか、という質問はあるけれども、有用かどうかという質問は入っていないでしょう。安心感と、利用すべきかどうか、有用かどうか。この3つを聞いたほうがいいと思います。

—— 学会の人には、経済発展は意味がある質問かもしれないけど、一般の方への質問としては、発展よりも、有用－無用のほうがいいかもしれないなという感じがします。

（木村） シンプルに、本調査票のこのページを丸々入れる、という手もあるのですけれども。だから、あとは入れるとしたら、有用－無用と、関心。

—— 関心を外した理由は、申し込んでくるような人は関心があるでしょうということですよ。

(木村) そうです。

おそらく、Q7 (省エネ)、Q8 (電気料金) を入れたときに、残りは 2 つしか入らないからということで、関心と有用—無用を外したので、それを復活させるという手はあります。

—— 利用、安心、有用の 3 つが入ると、例えば、「本当はやめたいのだけど、世の中を冷静な目で見ると、まだ必要な」という意見が反映できると思うのですよ。

—— 必要だけれども、不安だ、という答え方になるのかな。

—— そうですね。それから、有用かどうかというのは、またそれとは別に捉えられるから。

—— 私は、まだ心配な人が圧倒的に多いと思うのです。だから、安心—不安のところは不安に丸をつける。有用の質問は、やはりなければ駄目かなということで、有用に丸をつける。そういうオプションも出てくる。

(木村) 分かりました。では、今の話を伝えて、向こうで確定することにします。

—— 先ほどご意見があったように、申込者がたくさんいて、選択のオプションが必要なときには、今みたいなのが役に立つと。そうなることを願いたいですね。

—— それが理想ですね。

(木村) では、そういう形で向こうのほうに伝えていきたいと思います。

## 2. フォーラムのシステム化について

(木村) 次は、議題の 2 番目に移りたいと思います。フォーラムのシステム化ということで、A3 の資料をご覧ください。

どうやってシステム化するかということを、いろいろ検討して、いろいろ探した結果として、ビジネスでシステムを作るときのやり方みたいなものを少し参考にしています。1 ページ目の上の四角に書いてあるのがその概要で、ビジネス要件とシステム要件を明確にし

ていきましょうという話です。

ビジネス要件は3つあります。

- (1) 企業がそのビジネスを行う目的を明確にする。
- (2) ビジネスにより達成したい目標を設定する（例：売上高や利益など）。
- (3) 設定したビジネス目標を達成するための、プロセスやフローを定義する。

というようなプロセスを経るようです。

その上で、システム要件があります。

- (1) ビジネス目標を達成するために、ユーザーがシステムを使用して行う仕事を明確にする。
- (2) ユーザーの視点で、システムは何を行う必要があるかを定義する（例：商品を発注する）

まあ、私たちが言っているシステムとは少しずれている感はありますが、こういう段階を振った考え方をすることで、システムということ进行分析できるかな、ということです。特に今回はシステム要件を中心に議論したいのですけれども、システム要件というのは、ビジネス要件、システム要件というものを段階的に考えるときに出てくる要件で、そのシステム要件を基にして設計する、という順序なのだそうです。

今回のプロジェクトのビジネス要件、システム要件を書いてみました。上下が対応しているのですけれども、ビジネス要件は、

- (1) 福島事故以降の専門家と市民の関係性を改善する。
- (2) 専門家と市民の不信の悪循環をストップさせるためのコミュニケーション・フィールド（＝システム）を設計する。

少なくとも、専門家と市民の間にあると思われる境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドを設計することが最低限の目標。

- (3) 「フォーラム」を試作し、目標が達成できるかを分析し、「フォーラム」というコミュニケーション・システムが提供する機能を明確化する？

ということになります。このプロジェクトの中で、フォーラムというシステムを設計して、その機能を測定していくことが、実際のビジネス目標を達成するためのプロセスということになっていきます。

今、第1シーズンのフォーラムを終えて、そのインタビューを分析しようとしてつつあるわけですが、そのときに、こういう観点で分析をすると、システムとしてこのフォーラムが機能していたかどうかが見えてくると考えられるということです。

こういうビジネス要件をある程度決めたところで、ではフォーラムというシステムが持つべき要件は何か、考えてみました。薄く書いてある部分は、フォーラムというシステム

ができたときに、いろいろな人に使ってもらうこと（横展開）を考えたときに必要な要件なので、薄くしています。今はまだここまでは至っていないので。

なので、その下の2つが重要なポイントになるかと思います。

- (1) ユーザー（専門家と市民＝参加者）は、「フォーラム」を利用して、お互い尊重できる関係性を構築する。
- (2) (システムは) 参加者（＝専門家と市民）がお互いに尊重できるような場を提供する。

この場合、システムを構築する要素としては、事務局・総合ファシリテーター・サブファシリテーターなど、そういうものが全て含まれるということになっています。

では、裏を見てください。ここでは、フォーラムが満たすべき要件を、さらにブレイクダウンしてまとめています。

フォーラムのシステム要件は、「参加者がお互いに尊重できるような場の提供」ということになります。そのために、大きく2つあるだろうと。1つ目は、「フォーラムがビジネス要件を達成するために満たすべき要件」ということで、「参加者がお互いに尊重できる」ということ。もう1つは、「フォーラムを実施するために満たすべき要件」です。システム自体にある一定の性質がないと、そこに参加してくれないので。

「参加者がお互いに尊重できる要件」をさらにブレイクダウンすると3つあって、1つ目が、「参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく」ということです。2つ目が、「お互いが違っててもいいんだと思える」ということ。その違いを受け入れられるということ。3つ目が、「参加者同士が対等である」ということ。この3つの要素が、「参加者がお互いに尊重できる」というときに必要になってくる要件ではないか、ということで整理をしたところです。

一方、「フォーラムを実施するために満たすべき要件」としては、「参加者同士が公平である」ということです。あとは、「運営側がちゃんと信頼されている」ということが必要だろうというふうにブレイクダウンをしています。

ブレイクダウンしたサブ要件に対して、さらに細かく分けて条件をまとめています。

「1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく」ためには、「①参加者の客観視を導く、参加者同士のコミュニケーションを客観的に見るように導く」ということ。ここに対しての工夫は、ファシリテーターの経験、になります。

「②人となりを知るように導く」。このための工夫は、フェース・トゥ・フェース (FTF) のコミュニケーション。お互いの価値観を表明できるような話題設定。複数回のフォーラム。フォーラム後のお茶のみ時間の設定。コミュニケーションのルール化:「私は」という話し方をして、「私」を強調することで、その人が何を考えているかが分かるようにする。あとは、意見の可視化。

「③参加者の冷静なコミュニケーションを導く」。これは、コミュニケーションのルール化。FTF。過熱しすぎない話題設定（※参加者のレベルを勘案する）。総合ファシリテーター、サブファシリテーターのルール化。

「④ぶっちゃけトークを導く」。これは、なんて書いていいかわからなかったの、ぶっちゃけトークと書いています。個人情報非公開（参加者からの外部への情報制限）。お互いの価値観を表明できるような話題設定。フォーラム後のお茶のみ時間の設定。コミュニケーションのルール化。

というように、「いろんな考え方があると気づく」ために満たすべき要件と、さらにそれを達成させるための今回の取り組みの工夫点を整理して書いてあります。

「2. お互いが違っててもいいんだと思える」という要件に対しては、実は議論していませんでした。元々、「1. いろんな考え方があると気づく」ことができれば、2は自然に達成できると思って設計しているのです。現時点では個人の資質任せになっているということです。

インタビューを踏まえると、「お互いが違っててもいいんだ」と思える理由は様々である、ということが分かりつつあります。その一部をここに書いています。いろんな考え方があると気づく、それが一側面に過ぎないと気づく、自分と同じところがあることを見いだす、誰でもひとりの人間だと気づく、などです。いろいろなレベルで、「違っててもいいんだ」と思う人たちがいるようなので、システムとしては、少し、その辺を導くような仕掛けを入れてもいいのかなと思っています。

「3. 参加者同士が対等である（主に市民と専門家の間で）」に対しては、専門家からの一方的な情報提供になりにくい話題設定。席配置、ファシリテーター選定をくじ引きでやっていること。コミュニケーションのルール化：基本は「さん」付け、「先生」は使わない。これはあまり徹底はされませんでしたけれども、こういうこともルールとして入れてあるということが、対等であるということに対してのひとつの工夫ということなのです。

続いて、「フォーラムを実施するために満たすべき要件」のほうに移ります。

まず、「4. 参加者同士が公平である」に対しては、社会調査をベースとした参加者選定。コミュニケーションのルール化。これは発言機会の話です。1分以内という話です。インタビューで、「そうは言いながらもたくさん話している人もいた」という話もありましたので、そういうことも考えていく必要があるかもしれない。あとは、総合ファシリテーター、サブファシリテーターのルール化。記録の公開。この辺りは、公平であると感じてもらうためにやっていることかと思います。

「5. 運営側への信頼の獲得」。社会調査をベースとした参加者選定。特定の意見を誘導

しないような話題設定。参加者主導の話題設定。総合ファシリテーター、サブファシリテーターのルール化。記録の公開。適切な運営能力。フォーラムの適切な改善努力。というようなものが、要素として必要になってくるだろうと。

今回も気をつけていたし、これからも気をつけなければいけないことが、一覧で見えるようなものとして作っています。

今日、皆さんにお願いしたいのは、まずはこういう構造化が、全体としていかがでしょうかということ。もうひとつは、こういう工夫もしていたのではないのでしょうか、ということを指摘していただきたいということです。ごっちゃにすると大変なので、残りあと 30 分くらいですから、最初の 10 分で全体の構造についてのお話をして、最後の 20 分で、工夫点を挙げていただきたいと思います。

そうしたら、まずは全体の構造について、ご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか？

—— 2 番だけが赤ポツなのはどうしてですか？

(木村) 課題だから。

(竹中) 課題かつ、分析途中だからです。

(木村) ここに関して、竹中君から何かありますか？

(竹中) とりあえずこれでいきますけれども、ここを要素として書くのは難しいなという感じはありますね。

—— (1 ページ目の) 上の四角の箱は、事業を始めるときのひとつの基本的なフレームワークを表していて、フォーラムを事業として捉えて、ビジネス要件に無理やり当てはめているのだけど、ちょっとそこがピンと来ないなど。事業として捉えると、事業達成のためのシステムが必要になって、ゴールも明確化して、節目節目を設定して、それが達成できているかどうか、PDCA のサイクルを作って、みたいな話になっていくのだけど、原子カムラの境界を越えるような取り組みがどれだけ進んで、原子カムラというレッテル貼りが希薄になっていくということを測定する手段が、ないですよね。あちこちで壁がなくなって、会話ができるようになっていけばハッピーだと思うのだけれども、それをビジネスとして設定したときに、半年経って、1 年経って、どれだけうまくいっているかどうか。集めてきた 10 人に対しては、それなりの測定はできたし、次回もできると思うのだけれども、それが世の中全体ということになると、測定はかなり難しいなと思います。

(木村) まあ、今回は、世の中全体への話は置いておいてある、というところはあるのですけれども。横展開はどうか、という話は、よく聞かれます。一番難しい課題なのですけれども、もしかしたら使えるかもしれないなと思って、あえて事業化しているところもあります。

少なくとも、「フォーラム」というシステムを使ったときに、こういうところに気をつけて、システム要件のポイントがどのようになっているかを測定することによって、観測可能なのではないか、という提案でもあって。そして、これがそういうものであるならば、とりあえずシステムとして独立できるので、そのシステム自体を横展開していくことができていけば、いずれは…という。そういう種類の横展開をやらざるをえないのではないか、というのが、岩田先生との話し合いの中でのひとつのおとしどころなのですね。

—— となると、例えば農業に置き換えて考えると、我々がひとつの農園を作って、そこで育つリンゴはおいしい。それは確認できる。そうすると、そういう農家を増やしていかないといけない。

(木村) そうです。

—— 農家を増やしていくほうの話が入っていないなと思ったのですが。

(木村) それは射程圏外ということです。これはあくまでも、そういうところで使えるようなシステムの提供です。ビジネスをどうやっていくかは、国がまず考えないといけないのではないですか。その代わり、私たちは商品としてのパッケージを作ったので、

—— リンゴの木の育て方とか。このビジネスモデルでやれば、必ずその農家はおいしいリンゴができます。それを我々は提供します、ということですね。

国のほうは、そのノウハウを基に、あちこちにそういう農家を育成してくださいと。

(木村) そういうことです。そうやって、自分たちのできる範囲を狭めたい。というか、そうしないと、全てがもやっとしてしまうので。

—— その通りだと思いますね。我々にできる範囲は、そのくらいですよ。

(木村) なので、薄い字で「ユーザー（このシステムを使う人）は、「フォーラム」を利用して、お互いが尊重できる関係性を構築することを誘発する」と書いてあるのですけれども、これは研究成果としては出しにくい。提言くらいはしてもいいし、シンポ

ジウムでそういう議論をしてもいいかもしれないけれども、研究成果の一部としてこれを出すということは、検証もできないので、やりませんということです。

—— こういう活動グループがあちこちにたくさんできるような仕掛けについては、文科省なりが考えてくださいと。

(木村) そうです。そのときに、質がバラバラになるのではなくて、ちゃんと成果として期待できるものをベースに作って、やってくださいと。このパッケージだったら、どこまではできて、どこから先はできないと言っているし、できる分野に関しては、ここを気をつければこれだけの成果があり得ますよということを言っている。そういうことをパッケージとして示すと。

—— まずは元気ネットさんの助けが必要ですよ。

(木村) ただ、「最終的には、元気ネットさんがいなくても展開できるようにしていきたい」というような意見が、この前、原子力と社会の研究ワークショップで出ていました。コミュニケーションの研究者からそういう指摘があったのですね。「どうやって展開したらいいか、すごく悩んでいる。特に、専門家というのは必ずしも話す人だけではない。運営する人たちも実は専門家だ。そういうところまでもパッケージにしていくことを考えているのですか?」と聞かれたので、その通りです、と答えたのですが。

—— ファシリテーションができる、元気ネットみたいな集団を育成するのは、なかなか大変だと思いますね。

—— でも、ファシリテーターの勉強をしている人はたくさんいますよね。その人たちが力を合わせて、ああいふルールに沿ってやれば、できるのですよ。ただ、個人がつながることは非常に難しい。私たち以上の能力を持っている人はたくさんいるのですよ。ただ、私たちみたいにグループでやるということあまりしていないのです。

(木村) あまりいないですね。そうすると、次のプロジェクトのお題は、そういうことでしょうね。

—— 私は、原子力の専門家と一般の人たちとのコミュニケーションではなくて、福島の復興や除染の専門家と住民の人たちとのコミュニケーションの場を、福島の中でできたらいいなと思っています。

今、環境省や復興再生事務所は、それを渴望しています。要するに、頭ごなしにああし



ろ、こうしろ、と言うのではなくて、住民の人たちはどうしたいのか。そういう形の意味疎通の場ができるといい。それには、このシステムが役に立つと思うのです。

この前、崎田さんと一緒に、それに近いシンポジウムに出席しました。1回目は崎田さんが司会をして、きちんとリードしてやった。2回目は、崎田さんも私もオブザーバー席に座って、住民の人たちだけで主体的に運営したのです。結構うまくやっているのですよ。ああいうものがどんどん広がっていくといいなと。それは、一生懸命前向きにやっている人たちの集まりだから非常にうまく運営できているのだけれども、たぶん、ごく普通の住民の人たちがやるとあんな形にはならないので、それを広げていきたいし、再生事務所もそれを望んでいる。

その中で放射線の問題、あるいは除染の技術的な問題もあるので、専門家の役割も大事だと思うのだけれども。

(木村) 確かに、参加している人たちがコミュニケーションをしようと思っていなければ意味がないので、「参加者のやる気」は結構重要ですね。実施するために満たすべき条件として、重要だと思います。

—— 前回のフォーラムは、ものを言いたい人が集まってきたから成功したと思うのです。

—— 今の話で言えば、福島の場合は2段階あるのではないかと思うのですよ。

まずは、地域の住民の人たちとのコミュニケーションをうまくやっていきたいと思っている人たち自身が成長するフェイズ。3回くらいこういうことを経験すれば、私たちがサブファシリテーターとしてやったようなことができるようになる。

次に、もっと言いたいことがある地域の住民の人たちが集まった形をやっていくというような、段階があるような気がするのですよね。

そして、福島のことをやるのであれば、東京から私たちが行ってやるのでは駄目で、本当は地域の住民の人たちがやらないと駄目なのですよ。

(木村) それはとても重要なポイントで、でも、このプロジェクトではそこにはあえて踏み込まず、そのための基本的な道具を作ってあげよう、というところに落ち着かせようと思っています。

参加者にやる気があるというのは重要なファクターなので、入れさせていただきました。その他に、このシステムが成立するために、その指標になりうるものはありますか？

—— 「参加者のやる気」の中に入っているのかもしれませんが、参加者が目標を共有しているということは、前は完全に達成されていたかどうか分かりませんが、大事だと思います。

(木村) そんな感じで、なんでもいいので言ってください。あとでまた竹中君と整理します。

—— 最初の頃、サブファシリテーターに対する不信みたいなものも出ましたよね。なので、運営側の役割の明確化、役割に対する理解が必要だと思います。

サブファシリテーターが何なのかとか、そういう基本的なところ。まあ、ファシリテーターそのものがよく分からなかったりするわけだから、ましてやサブファシリテーターの役目なんて、漠然としていてよく分からないと思います。そんな中、意図的にやっているつもりはないのだけれども、少しリードしかかったら、不信感を持ってしまう人もいるのではないかと。その辺を気をつけることが大切かなと思います。

—— 今のご意見はとても重要だと思います。この前のシンポジウムで、元気ネットのプレゼンを聞いたフォーラムの参加者の人たちが、「ようやく分かった」とおっしゃっていたので。

次回は、フォーラムの冒頭で、サブファシリテーターがどういう素性の人たちなのかということを中心に説明して、少なくとも、ムラの間人ではないということを明確に理解してもらおうことが大事ですよ。

(木村) 運営者や協力者の素性の理解ということですね。

他はどうでしょうか？

—— 「①参加者の客観視を導く」のところですけども、グループワークの発表をすることは、客観的に見ることの助けになるかなと思います。発表する人だけでですけども、かなり意識して話されていたのではないかと。

(木村) 特定の人しかできないけれども、それをどうするかということになりますね。

—— 1回発表をした人はもうやらないとか、そういうルールがないと。

でも、主観的な発表もあるのですよね。話し合った内容ではなくて、自分の考えだけだな、という発表もありましたよね。

—— 「これは私の意見です」と断りながら発表した人もいましたね。

—— ちゃんとグループで話し合ったことを発表して下さい、ということをはっきり皆に分かってもらわないと駄目ですよ。個人の意見ではないということ。

—— もしかしたら、ファシリテーターと同時に、グループワークの発表者も順番で決めていくほうがいいのかもわからない。

そして、「発表者はこういうことに気をつけて発表してください」というルールがあると、今回あなたが発表者ですと言われたときに、それを守って話し合いを聞いているかもしれないですね。

—— 心構えを事前に持っているのと持っていないのでは、全然違いますよね。

(木村) そうすると、発表者もくじ引きとかにしておいたほうがいいのかもありませんね。

—— それで、なるべく発表者はだぶらないように。1回やった人はやらないとか。

—— できればファシリテーターもだぶらないように工夫できるといいですね。

—— 3回はやらないとか。

(木村) 2回やったらもうパスできるとか、そういう仕組みが必要かもしれません。

—— 同じ人がファシリテーターになっていたような気がします。

(木村) インタビューによると、くじが見えると言っていましたよ。だから、選ぶ人は選んでいたみたいです。

—— 避けたわけですね。

(木村) そうです。避けている人は避けていて、だから遅く来る人たちが当たってしまう。見えないようにしたら、もう少しばらけるかもしれません。

—— うまいファシリテーターの人が、意見を引き出してくれることがあるじゃないですか。それによって、自分の考えが言えるようになることだってあるわけです。ファシリテーターに焦点を当てて見ているけれども、逆の効果もあるわけですね。

(木村) それはどこかに書かないといけませんね。「④ぶっちゃけトークを導く」に近いですか？ 別にしておきましょうか。「自分の意見を言えるようになる」ですね。

—— あとは、人の意見を聞いて、意見を導かれることによって、自分の中でまとまらなかったことがだんだん整理できてくるとか。

(木村) ええと、人の意見を聞いて、考えがまとまる。あとは、人から引き出されるでしたね。

—— ブレインストーミング的な手法というのは、企業や研究機関では何度も経験することだけど、一般の方にはそういう機会がない。そういうことをやると、自分の考えも整理できるし、人の考えも理解できるようになる。それは、原子カムラの境界を越えるために必然的なプロセスだと思うのです。だから、今のポイントは重要ですね。

(木村) ブレインストーミングと書いたほうがいいですか？ それとも、グループワークですか？

—— 双方向のグループワークだと思います。PTA では、絶対こうはならないです。PTA は言いつばなしだから。

—— そうですね。ブレインストーミングなんて難しい言葉を言わずに、グループワークでいいと思います。グループワークの中に、意見を聞いたり言ったりするノウハウが詰まっているような気がします。

—— そういう意味では、「オープンエンド」はどこかに入りたいですね。

—— ちょっと気になったのは、資料 F7-5 に、「意見共有」という言葉が出てくるでしょう。一般の人が「意見共有」という言葉を聞いた途端に、金太郎飴になることを求められるのかな、と誤解しないといいなと思いました。

(木村) 「共有」というのが駄目なのですね。

—— 「共有」は、専門的な定義では、1つの意見にまとめるということではないのだけれども、

—— まあ、普段「共有」なんて聞かない人にすれば、「1つの答え」ととられる可能性はありますよね。

(木村) どう書けばいいかな。

—— でも、「意見共有」なのですよ。「意見共有」という言葉は活かしたほうがよくて、その後ろに注釈みたいなものがあつたほうがいいのかもわからない。

(木村) なら、このままでいいのかもしれませんね。「全体で、意見共有をします。いろいろな立場の人が、さまざまな意見を持っていることに気づき、お互いを認め合うきっかけとします」と書いてあるから。

でも、もうちょっといい言葉があるといいですよ。 「意見語り合い」とか？

—— 発表？ 報告？

(木村) 発表のほうがいいのかもわからない。

—— 「シェアリング」と言ったりしますよね。でも、日本語に訳すと「共有」になるのかな。

—— ワークショップに慣れていると当たり前に使ってしまうけれども、そういうことを経験したことがない人にとっては、「共有」と言うと、そういうふうを感じるかもしれない。

(木村) そろそろ時間ですが、他はいかがでしょうか？ 20日の全体会合のときにも続きをやるかと思っています。とりあえずは、よろしいでしょうか。

### 3. その他

(木村) さて、最後にその他の項目ですが、そろそろ年度末に向けたスケジュールを調整したいと思います。

全体会合は、20日に第4回があつて、そのあと3月に第5回があつて、終わりになります。第5回については、第4回の後、すぐに調整したいと思います。

フォーラム研究会としてはどうでしょうか？ インタビューの結果がある程度まとまるのは2月ですか？ でも、このシステム化がもう少し詰まってきたら、それに当てはめて、今回の成果がどうだったか、というのを見ますよね？

(竹中) そうですね。

(木村) そのほうが順番としては分かりやすいですよ。

(竹中) 分かりやすいですね。

まあ、影響されすぎないようにしたいとは思いますが。

(木村) そうだけど、ある意味、これが尺度として成立しているかどうかのチェックもしなければいけないので、そのチェックとしてやっていただければと思います。

(竹中) 1月に1回あると、楽と言えば楽です。

(木村) そうすると、システム化の議論をする回が1月に1回必要と。

逆算をすると、フォーラムの参加者を確定する回が、2月にないといけません。

—— そうですね。また応募が足りなかったり、多くて選定に困ったりするかもしれない。

(木村) まあ、多いほうはあまり期待できませんけれども。

結局のところ、シンポジウムで谷口先生がおっしゃっていたように、「こういう取り組みには人は来なくて当たり前」というスタンスでいくと、やはりこちらからお願いをしなければいけない。ただし、今回(第2シーズン)の選定の仕方は、前回(第1シーズン)よりも公平性に配慮できるような形で、例えば、集まってきた申込書を開票する前に、何人かをお願いをする、という感じにしたほうがいい。となると、それなりの時間が必要かなと思いますので、フォーラム参加者決定は2月末くらいになるでしょうね。

だから、1月に1回、2月に1回、3月に1回、くらいでしょうか。3月のときには、分析もある程度済んだ状態でお出しして、このグループとしてどういう報告ができるかという議論をしたいと思います。それが、全体会合(3月実施の第5回)より前に行なわれる必要があるということになりますので、その辺で調整をしていきたいと思います。

皆さん、今、日程はわかりますか? 可能な範囲で決めてしまいたいと思います。

(日程調整: 中略)

(木村) では、第8回は、1月20日、もしくは21日の13:00~16:00でいいですか? メールで他の方に問い合わせ、参加者が多くなるほうにしたいと思います。

第9回ですが、申込書があがってくるのが、2月上旬だと思います。1月31日締めだから、そこから1週間見て、開票して、なので、早ければ2月17日くらいにやってもいいかもしれないのですけれども。

でも、そこで10名に達しなければ、声をかけることになりますよね。1月の終わりで回収数がだいたい分かってくる。足りなければ、その後、皆さんに周りの人に声をかけても

らう期間があります。そのときには、応募書類一式を配ってもらって、参加申込書を書いてもらって、それを回収する必要があります。それが集まってきてから全部開票するので、そうすると、やはり第9回は2月の最終週がいいですね。24日の週の都合はいかがでしょうか？

(日程調整：中略)

(木村) では、第9回は、2月24日の13:00～16:00にします。

第10回は、3月10日の週にしましょう。いかがでしょうか？

(日程調整：中略)

(木村) そうしたら、3月10日、11日、12日の13:00～16:00が候補で、皆さんの予定を確認して、決定したいと思います。

ということで、10分ほどオーバーしましたが、今日の議題は以上になりますが、何かございますか？

今週の金曜日は全体会合ですので、よろしくお願いいたします。

また、修正を反映した資料も配りましたので、あとで見ていただいて、誤字脱字などがありましたら、指摘してもらえればと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、これで第7回を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上